

我孫子の景観を育てる会

景観あびこ

ホームページに掲載されています。
<http://abikoikeikan.g1.xrea.com/>
創刊 2002/3/29

我孫子景観基礎研究3 その1：身近なデザインの潮流と都市景観のつながり-7

野口 修(建築家・工学博士)

7-1. 荻外荘記事が生んだつながり

景観あびこ 128号で書いた杉並区荻窪の荻外荘復元・整備プロジェクトに関する記事は、幾つかのアクションにつながった。10月には、会員有志の方々、我孫子でグリーンスローモビリティの実現を目指すグループの方々と現地を再訪して意見交換できたし、130号のシリーズ『我孫子の魅力再発見』では、我孫子市教育委員会文化・スポーツ課の今野澄玲さんから近衛文麿と我孫子市の関係について再認識させてもらった。

128号を書いている際はすっかり忘れていたが、当会の定例会が開かれている近隣センター“こもれび”こそが、旧近衛文麿邸跡だった。

同号における今野さんのご指摘の通り、我孫子に住んだ文化人のその後の住まいを見ると、手賀沼の景観を思い起こさせる事例がある。

本誌 88号で触れた調布市仙川の武者小路邸もその一例だ。多摩川が武蔵野台地を削って出来た国分寺崖線にあって、我孫子で言えば、水辺に近い旧志賀直哉邸の様な印象を受ける。



写真1：荻窪～荻外荘を巡るお出かけ倶楽部の様子



写真2：水辺に近かった調布市・旧武者小路実篤邸の俯瞰と外観

その後の住まいの変遷を見て、筆者は我孫子で暮らした白樺派の3人の中で、最も水辺に近い場所を好んだのは、武者小路実篤ではないかと感じているが、それが元来のものなのか、社会的立場や人生観の変化によるものなのかは興味深いところである。

あらためて明治後期から昭和初期までの手賀沼景観が“つないだ”人々の多様さに驚かされる。同時に、これを景観資源の一部と捉えて運用することは、我々に課された大切な役割と考える。

まずは手賀沼の水辺が持つ記憶を掘り起こし、我孫子市内外の幅広い世代に興味を持ってもらうことが、目下、本誌が目指すところだろう。

7-2. 駒場通りの日本民藝館

前項を受け、景観を介して最近体験した幾つかの“つながり”について紹介したい。

まず11月の初旬、日本民藝館を訪ねた。京王井の頭線の駒場東大前駅から駒場通りを歩いて約7分。目的は、本年の6月から11月まで3回に分けて行われた棟方志功展を観るためだった。

筆者が足を運んだのは、棟方志功展Ⅲ『神仏のかたち』の回で、全館至る所に棟方の版画が展示され、強い創作エネルギーを感じさせる展覧会だった。特に2階の大展示室に並べられた『二菩薩釈迦十大弟子』はその象徴的な展示で、多くの来場者が足を止めて撮影していた。



写真3：日本民藝館内、大展示室の様子

日本民藝館が在る駒場通りは、斜向かいの西館（旧柳宗悦邸）以外は一般の住宅が並び静かな通りだが、俯瞰してみると、これを挟むカタチで、東側に駒場公園と東京大学の駒場キャンパス、西側に同じく東京大学の先端科学技術研究センターの建物に囲まれた学究空間を南北に貫通する不思議な立地の通りで、日本民藝館の裏手に当たる、駒場公園と駒場キャンパスの間の通りも同じく駒場通りとなっている。



写真4：日本民藝館（左）と西館（右）。西館の背後には
東京大学先端科学技術研究センターが覗く

駒場公園内には、2016年に志賀直哉の原稿、草稿、書簡、絵画筆墨、写真など、計11,886点のコレクションを寄贈された『日本近代文学館』がある。本誌89号執筆時に訪ねて以来の再訪だったが、建物の劣化が放置されたままだった。また、園内には、邸宅として用いられた洋館と、外国要人の接客に用いられた書院造の和館で構成される旧前田家本邸も建っている。

7-3. 『VILLA COUCOU』の話

駒場通りを北に抜け、帰りは代々木上原駅から新宿に出ようと歩いていると、既視感のある通りに出くわした。6月に訪ねた住宅建築『VILLA COUCOU（ヴィラ・クックゥ）』が近いことに気付いたのだ。この住宅は、建築家で早稲田大学教授だった吉阪隆正（1917～1980）と吉阪が主宰したU研究室の設計で、元はフランス文学者で早大教授の近藤等が建主だった。

その後、住み手だった近藤夫妻が没して解体も検討されたそうだが、現在は女優の鈴木京香さんが継承して定期的に公開している。

COUCOU（クックゥ）は、フランス語でカックウ。建主の妻であるカツコさんのニックネームということだ。

吉阪隆正は、日本における近代建築の黎明期に前川國男、坂倉準三らとフランスの巨匠ル・コル

ビジェに師事したことで知られ、帰国後はアテネ・フランセや早稲田大学の八王子セミナーハウスなど、自由形態のコンクリート建築や大胆な木構造の山小屋を手がけられた。

登山家としても有名で『VILLA COUCOU』の建主は、早大山岳部の後輩ということだ。

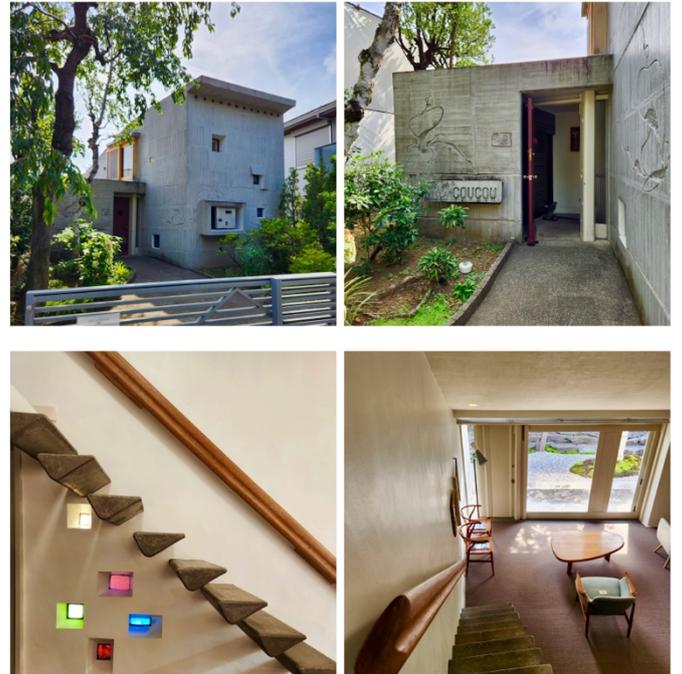


写真5：『VILLA COUCOU』の外観・内観

一方、筆者が注目するのは吉阪が今和次郎にも師事していたことである。

今和次郎（1888～1973）は、建築学や民俗学の研究者として早稲田大学理工学部建築学科の教壇に立ち、『考現学』を提唱した。

元々は民俗学者・柳田國男の門下として『白茅会（はくぼうかい）』に所属し、日本やその周辺地域の農村生活調査、風俗調査、服装研究を行うなど、民家研究と生活学の礎を築いた。調査内容をまとめた独特のスケッチは、現在でも建築を学ぶ人に影響を与えている。

そんなこともあり『VILLA COUCOU』の現在に関しては、空間内部のスケールや細部まで造り込まれたディテールが新鮮で、感心するところも大きかったが、庭の在りようには閉口した。

今和次郎の下で、民家研究や集落調査に参加した吉阪の生活観を垣間見るべき庭が変にデザインされており、「なんでも“アート”で言い抜けるなよ」と、広告媒体化された現在の姿には正直がっかりした。ビジュアルだけでなく、もう少し硬派な議論がなされても良いのではないかと？



写真6：ル・コルビジェが設計を担当し、前川・坂倉・吉阪が協力した上野の国立西洋美術館

7-4. 本年のこと

ところで、今和次郎が籍を置いた『白茅会』を主宰した柳田國男（1875～1962）は、我孫子市布佐で幼少期を過ごした。民藝運動の柳宗悦（1889～1961）とも比べられる柳田についてはこれまで触れる機会がなかったが、我孫子での痕跡を辿りながら、本年は折に触れて見直したいと考えている。

また、吉阪隆正に触れたことを機に、コルビジェや現代建築に繋がるデザインの潮流についても考えてみたい。（続く）